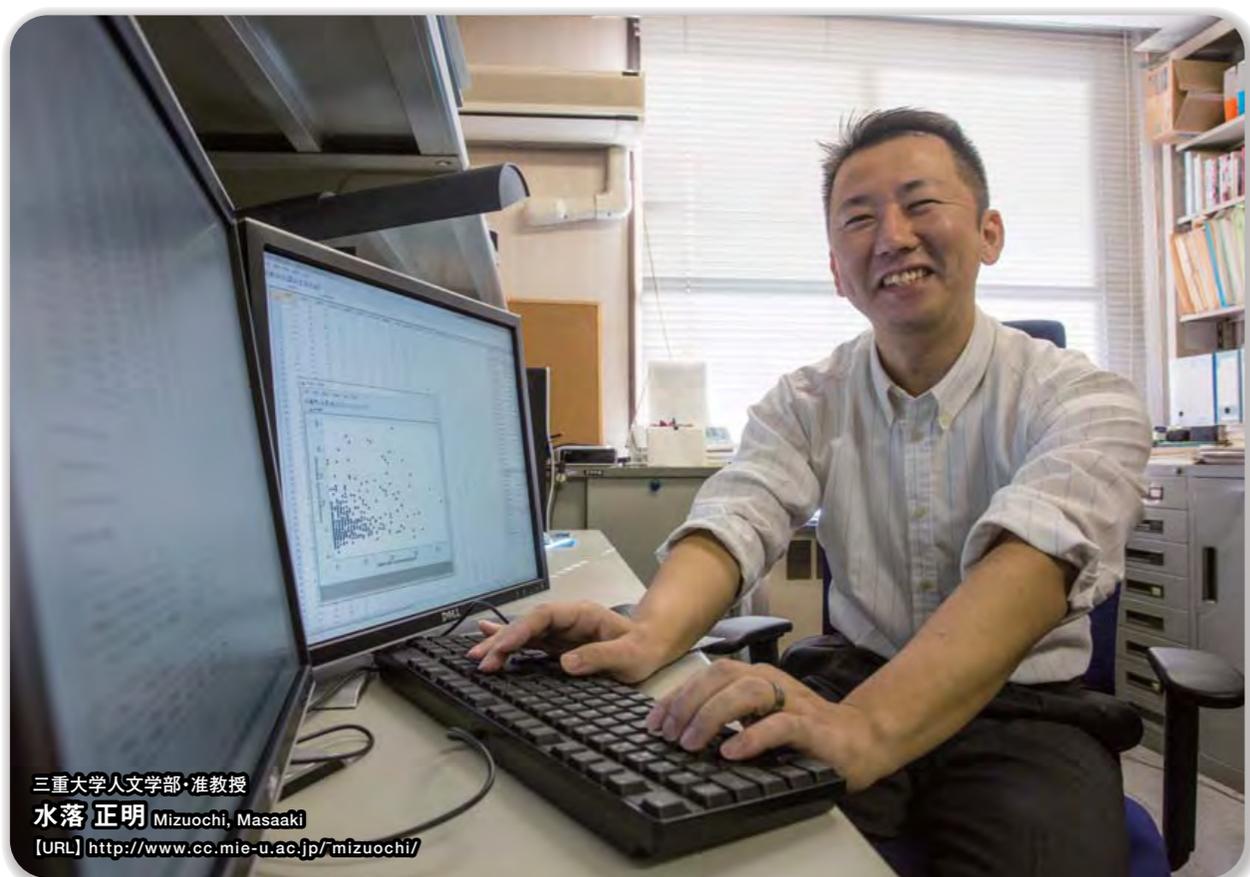


特集 おもしろ研究・先生Ⅸ

計量経済学で世の中の中の関係を明らかに
試験の得点から政策まで

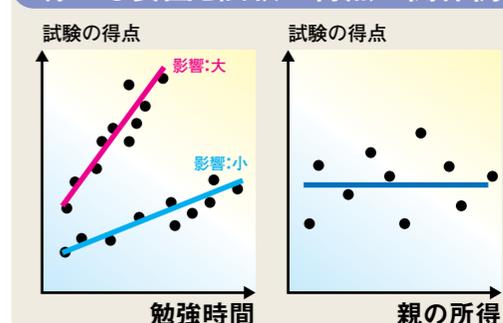


三重大学人文学部・准教授
水落 正明 Mizuochi, Masaaki
[URL] <http://www.cc.mie-u.ac.jp/~mizuochi/>

計量経済学の分析方法

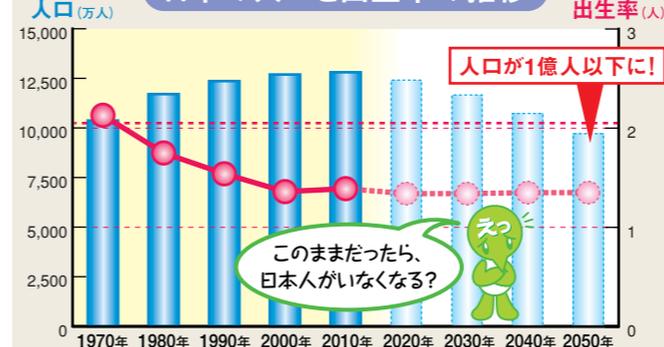
では、どのようにして関係性を確認するのでしょうか。計量経済学では、関係性を確認するために「回帰分析」というツールを用います。試験を受けた子どもの得点と勉強時間、親の所得などのデータを集め、その平均的な傾向を直線ととらえます。これによって勉強時間などの要因が試験の得点に影響を与えているのか、また勉強時間を1時間増やすと平均的に試験の得点が何点上がるかがわかります。さらに、同じ人を継続的に観察（パネル分析）することでより正確に分析することもできます。

様々な要因と試験の得点の関係例



この場合、親の所得は試験の得点に影響を与えていないことになるね。

日本の人口と出生率の推移



出典：国立社会保障・人口問題研究所
「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）：出生中位・死亡中位推計（各年10月1日現在人口）」

計量経済学は政策に近い学問!

こうした関係性を確認するのは、政策的にも重要です。少子化を例に挙げてみましょう。日本では、少子化が深刻な社会問題として取り上げられており、とうとう人口減少時代を迎えました。合計特殊出生率も1.39（2011年）と人口を維持するために必要な合計特殊出生率2.08を大きく下回っています。少子化対策が行われるべきですが、有効的な政策を行うためには、計量経済学で導き出されたエビデンス（客観的証拠）に基づいた議論が必要になるのです。

計量経済学とは？

世の中には影響がありそうでも実際はどうかかわからないものがあります。こうした影響の有無と大きさを統計学的な観点から確認するのが計量経済学です。たくさん勉強した子どもは、試験の得点も良い。一般的に言われていることですが、実際に勉強時間は試験の得点にどれほどの影響を与えているのでしょうか。勉強時間の他にも、教育の質、親の学歴や所得などの要因も子どもの試験の得点に影響を与えているかもしれません。

学力で考えてみると...



イクメンになると少子化が解決する？

こうした危機的状況の日本を救う要素の一つが「イクメン」の存在です。男性が育児に積極的に協力することで、出生率が上がる傾向が確認できました。さらに、育児のための休暇が長ければ、子どもの数が増加する確率も上昇しています。ただ、男性の育児に関する休暇取得はまだまだ少なく、男性が育児のための休暇を取得できるように政策的に支援していく必要があります。このように政策の方向性を見出し、世の中の関係を明らかにするのが計量経済学です。

